せかいはすくわれた。

世界を破壊しようとしていた存在は人類がその英知の限りを尽くして作られたいずれの武器・兵器も役に立たなかった。傷一つ付けることも叶わなかった。核を筆頭とした様々な兵器が用いられた。ウイルス兵器は余すところなく使われた。その代償は大きく、一つの大陸の大部分を今後数世紀にわたって続く地獄そのものに変えてしまったが、人類の滅亡と天秤にかけた場合、どのような代償も劣るのは必定だ。しかし、人の手による兵器が何も通用しないことがわかったのは、その代償を支払い終えた後だった。

にもかかわらず、せかいはすくわれた。

救世を果たしたのはひとつの集団だった。その中核にいたのは様々な国籍の、複数人のまだ若い男女だった。彼等彼女等は確かな身元を証明できる者たちだった。最年長は二十四、最年少は九歳だった。彼等彼女等は特別な力を以って救世を成した。画面の前にいたすべての人々は救世を成すまでの経緯と瞬間を見ていたはずだったが、すでに彼等彼女等の存在は、噂話、もしくは作り話、はたまた陰謀論のような形で語られている。残酷極まりない話である。

それらはすべて、救世を果たした集団の力が確かなものだと理解している者たちの指示によるためだった。

完璧な情報統制を成している大権の保持者等は、地図上にない島に建てられた白い建物の一室で、結論ありきの議論を開始した。

「……彼等はまだ目覚めないのか？」

「ああ、眠っている」

老爺の問いに無機質な声が答えた。短い沈黙の後、別の声が響いた。

「今しかない」

人間味のある声色による発言は、リアリズムの名を借りた非情な決断を示していた。発言には決意が凝固していた。極めて打算的な決意だった。

「そもそも、我々の兵器は通じるのか？」

「系外生命に使われた軟化剤を投薬すれば問題ない」

答えた冷たく固い声に若い声が反応する。

「必要量はもうだしてあるのかい？」

冷たく固い声が肯定した。

誰もが口を閉ざした。

「反対意見はあるか？」

老爺が訊ねた。誰も何も言わなかった。その場の誰もが救世を成した若者等の命よりも、その肉体に宿る神秘を明らかにし、現状でさえ崩れようのない立場をより強固にしたがった。

その場の誰もが善意と悪意と倫理と道徳を理解していながら、保身を優先した。